



医院を新築/リフォームされた医師の先生と
建築を手がけた担当者の方のリアルな声をご紹介します。
医院への思いやこだわり、
それを実現するプロの提案力や工夫とは。
新規開業・継承開業などさまざまな事例から学びを得て、
これから医院建築を考える際に役立つ情報を
全10回でお届けします。

CASE 10

ワンチームで 理想を形に



理想は「白い陶器のキャンドルハウス」。均等の窓に光が灯るシンプルな印象をイメージし、光を取り込む窓を数多く配置した端正な佇まいに仕上げました。

世田谷区若林の住宅地の一角で、
2026年2月にオープンを迎えた「松陰こどもクリニック」。
この場所に地縁のあった康子先生は、
賢太郎先生と夫婦二人で
地域の笑顔を支えるクリニックを目指しました。
小児科・アレルギー科を専門として、
子どもたちの健やかな成長と子育てに関わる
すべての家族の安心を支えるために
医院にどのような思いとこだわりを込めたのでしょうか。
豊富な経験と技術を持つ医院建築の専門家として
設計を担当した緑幸寿さんも交えて、
完成までの経緯や創意工夫を伺いました。
取材日：2026年2月6日



子どもと大人が手を取り合うロゴは康子院長がデザイン。「小さい手は息子たちの手をかたどり、大きい手は私の母の手が見本です。手をつなぐことは特別な愛情表現で、親子同士、患者さんと医療者など多様な受け取り方ができるように。この地域は公園や遊歩道が多く、散歩する方々がロゴを見て隣にいる相手とぎゅっと手をつなぎたいと感じていただけたら」。また平和と幸せを象徴する青い鳩もモチーフです。

S H O I N
C H I L D R E N ' s
C L I N I C



上下の間接照明が印象的な1階受付には、荷物置き用に高さの異なる2つのカウンターを造作。子育て世代に普及しているキャッシュレス決済を導入して利便性を高めています。

松陰こどもクリニック

院長 増古 康子 (写真左)

2006年杏林大学医学部 卒業、杏林大学医学部付属病院 初期臨床研修。2008年杏林大学医学部付属病院 小児科。2026年松陰こどもクリニック院長。

医師 増古 賢太郎 (写真右)

2006年杏林大学医学部 卒業、杏林大学医学部付属病院 初期臨床研修。2008年杏林大学医学部付属病院 小児外科。2013年島村記念病院外科医長。2020年島村記念病院副院長。





康子先生による手描きスケッチ。計画当初の3階建ての外観から内装や家具の置き場まで描かれています。

まずは開業にあたっての物件選定や 医院全体のプランについて伺いました。

康子院長 今回の開業は、物件選定をしたというより、この場所に導かれた開業だったと感じています。祖父母宅のあったこの地には、幼い頃からのたくさんの思い出があります。祖父は、以前この場所にあった外科診療所の先生に命を助けていただきました。そのお世話になった診療所が2年前に閉院し、建物が解体されているところを見て、地域に根付いてきた医療の営みが消えてしまうようで何ともいえないさみしさを覚えました。祖父は、私が幼い頃から勉強を教えてくれて、医師になったことも大変喜んでくれました。祖父が元気でいてくれて、たくさんの愛情を注いでくれて今の自分があると感じています。次は私が小児科医として「命をつなぐ仕事」がしたいと、この場所での開業を思い立ちました。地域医療を引き継いでいきたいとの想いから、クリニック名は前診療所の名を受け継ぎ「松陰」としました。突然のことで事前の診療圏調査などもしておらず、不安もありましたが、夫や家族も賛同し後押しをしてくれて、開業を決めました。まず何から始めて良いかわからず、自宅を建築していただいた際の担当の方に急い

で連絡を取り、そこから本当に多くの方々のご協力を得て今に至ります。

増古医師 建物のプランは妻が描いたスケッチがもとになっています。外観や内装から備品の配置まで事細かに絵にしてスケッチブックにまとめていたのには驚きました。

康子院長 準備をする中で悩むことや、不安になることも度々ありましたが、絵を描くと前向きな気持ちになって頭の中が不思議と整理されていきました。自宅の建築の際もスケッチをしてイメージをお伝えしていたことを思い出し、今回も同じようにしてみようと思いつきました。それらをもとに緑さんと議論を積み重ねていく中で、自分たちの想定以上の図面にまとめてくださいました。

外観の理想は白い陶器のキャンドルハウスのような建物でした。均等の窓に光が灯るシンプルな印象をイメージして、外観を保ちながら採光条件など構造的なご相談をしながら実現していききました。

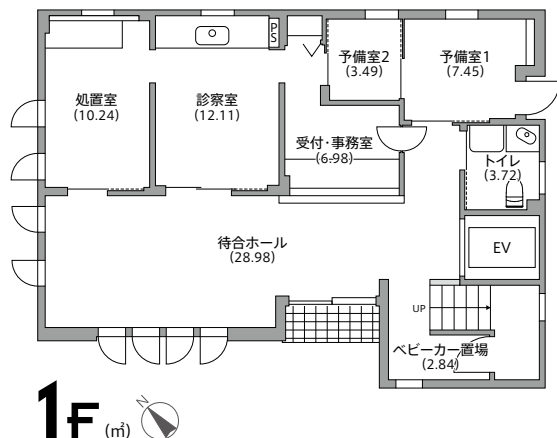
緑 ここはこうしたいという先生の熱意に影響され、期待感以上にお応えできるよう心がけました。開口部の確保でも、外部

に接した部屋と接していない中部屋を一体にするなどのご提案をしました。

増古医師 当初は3階建ての想定で1階2階が医療フロア、3階がスタッフフロアでしたが、周辺環境（道路や隣地）の採光を確保するための斜線制限により2階建てへ変更しました。階段を吹き抜けにして広く見えるようにしたかったのですが、3階建てだと防火扉を設ける必要があって実現が難しかったこともあります。2階建てになった分、ワンフロアはできる限り広く使えるよう図面上で数cm単位のご相談をしながら診察室のレイアウトなどを決めていきました。

緑 そうしたゾーニングを進める中で、例えば本来なら階段は2つ設けますが、決まった敷地面積で空間を最大限活用するためスタッフ用の階段をなくすなど、先生方のご判断が早くプランの骨格がスムーズに出来上がっていききました。

康子院長 ワンフロアの左右に入口を設けて感染・非感染の動線を分離することが現代のスタンダードかと思います。ただ土地の広さや建物の開口に関しても制約があったことから、1階2階の上下フロアで対応することにしました。1階が発熱や風邪症状の外来フロア、2階が予防接種・健診フロアで、将来的にアレルギー外来にも使用したいと考えています。



1階の待合室は診察室や処置室と一体的につながり採光を確保。木目のフローリングで統一感を持たせた空間にグリーンが設置されています。



勝手口側に設けた空気感染対策用の予備室1。
アプリコットカラーでまとめた明るい空間です。



予備室1からつながる予備室2には、空間の寸法に合わせた
ベッドやパソコンラックを備えました。

1階の空間づくりでこだわった創意工夫や インテリアについて詳しく教えてください。

康子院長 まずは入り口を入ってすぐに空間が広く見えるよう工夫をしました。フローリングの木目の方向、ソファの色味や並べ方、そしてどこに目線を持って行くかという点も考慮してグリーンを配置し、また時計の高さにもこだわりました。

ロゴはブルーではなく壁と馴染むグレーにし、大きさも控えめにすることで、圧迫感をなくしました。カウンター上下のライトアップも視線がとまりやすく、雑然としがちな受付に安定感が出ると思いました。受付のライトアップは入り口ドアのガラス越しに外からも透けて見え、建物全体に温かさを感じさせる効果があると感じています。

待合室の窓は曇りガラスではなくクリアガラスに布製のブラインドを用いることで横ラインを強調し、光が透けて入る空間に伸びやかな柔らかさを創出しています。ソファは最小限にし、患者さんの人数に応じて補助いすを使用し対応するようにしました。椅子の質感もフローリングとソファに馴染ませ、また座面がさりげなくアクセントとなるものを選んでいきます。

緑 入り口への通路は医院から外へ出る際、お子様が道路へ真っ直ぐ飛び出さない

ようクランクさせています。ベビーカーに配慮した勾配やロートアイアの柵を備え、安全性を高めた設計です。

康子院長 外構とつながって自然に馴染む柵をご提案いただきました。

待合室の正面にあるのが主に発熱や風邪症状の患者さんを診る診察室です。部屋の横幅と奥行きはある程度決まっていたので、その中で裏の動線を確保し、診察しやすさと患者さんの出入りのしやすさにこだわりました。床材を待合室と連続させて一体感を持たせることや、机も圧迫感や病院感が出すぎないものを選び、壁面の鳥のインテリアなど視覚的な効果も考えました。院内のアクセントクロスは私が好きな3色を用いています。温かみと落ち着きを兼ね備えたアーモンド色は診察室に。柔らかなグリーンは処置室に、気持ちが明るくなるようなアプリコット色は予備室に用いました。また木立の壁紙は自宅にも取り入れたかったもので、1・2階のトイレと2階の授乳室に用いています。いずれも色味と柄を少しだけ変えて部屋のイメージに合わせています。

処置室は主に吸入と吸引、点滴などを行うスペースです。無機質になりすぎないよ

うに、アクセントカラーのグリーンの壁に絵を配置しました。ゆくゆくは患者さんの作品を飾れるようにと考えています。

バックヤードは色調の統一感と清潔感を重視し、棚を引き出しやすい高さにしています。後ろから採光を取るため棚の上に窓を設けたほか、通路幅は通りやすさにこだわりました。

緑 トイレは人感センサーが反応して使用中のサインが光る仕様です。またトイレの広さや車椅子の方に配慮した段差の解消、扉が開く幅も広く確保するなど、東京都福祉のまちづくり条例施設設備マニュアルに則って設計しました。

康子院長 残る1階には2つの予備室と勝手口を、スタッフの出入口のほかに空気感染対策として設けました。元気が出るような空間にしたいとアプリコットカラーにした予備室1は、解放して待合の拡張スペースとしても利用できます。予備室2は迅速検査などが必要となる場合の使用も考慮して配置しました。

全体のインテリアは統一感を持たせつつ、普遍的な安心感と小児科らしさをどう両立するかを考えました。お子さまだけでなく付き添いのご家族もほっとできる空間にするため一工夫することを心がけています。また、院内のどこにいても音楽が聞こえるよう音響設備にこだわりました。



グリーンのアクセントクロスが開放的な空間を演出する1階処置室。
吸入や吸引、点滴を行うスペースとして各機器が配置されています。



メインの診察を行う1階診察室はアーモンド色の壁紙と鳥のインテリアが目を引きます。
吊り戸棚の上をあえて塞がず、奥行きを持たせることで診察室に開放感を生んでいます。



1階と同じ構成とした2階の待合室は約2.6mの高天井が開放的。布製のブラインドを透過して差し込む光が明るい空間です。



2階の待合室のコーナーにはキッズスペースを用意。木のウォールステッカーは、これから多彩な葉っぱを付けて空間を彩っていきます。

続いて、吹き抜けの階段や 2階の空間についてもお聞かせください。

康子院長 吹き抜けの階段のブルーの壁紙は空をイメージしています。階段横のベビーカー置き場は、雲の形をした照明がポイントでつい入りたくなるようなスペースに仕上がりました。この照明は触っても安全なシリコン素材で、お子さまが目線を移してワクワクしながら階段を上っていける空間です。

増古医師 当初の3階建ての計画では、さまざまな規制の中で階段を吹き抜けにするこ



とができず、この空間がどうしても狭くなってしまいました。結果として2階建てへの変更で空をイメージした吹き抜け階段が実現できてよかったと思います。

2階は予防接種と健診フロアですが、受付などの間取りは1階と共通になります。1階と2階でそれぞれ受付が必要になっても使えるプランとしました。柱の位置なども同じになり、建物の構造としても安定すると考えられます。

2階のフロアだけを少し広げようと、2階部分を外に張り出させる案もありましたが、外観の印象が損なわれてしまい、1階と2階は同じ広さにする現状のプランに落ち着きました。

緑 おっしゃる通り、図面上で1階と2階の差異がないというのは構造的に非常に安定します。また、2階は勾配天井を造作でフラットにして、1階と同じ約2.6mの高天井としています。平面的にも立体的にも広がりのある空間設計となりました。

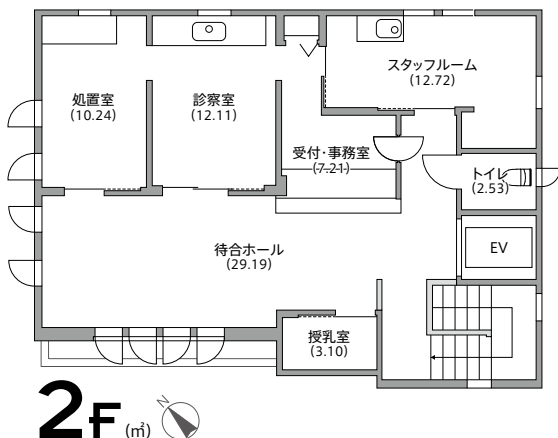
康子院長 1階と2階では構造的に共通する部分も多くありますが、内装で1階と2階の雰囲気は変えています。1階は誰もが安心感を感じられる色調に統一。一方で2階はお子

さんやご家族が退屈せず過ごせるように、コロナ禍以降は賛否あるキッズスペースをあえて設けました。1階と2階でフロアを分離したことで比較的安心して過ごしていただけたと考えています。

木のあるクリニックにしたいと、キッズルームに木のウォールステッカーを貼りました。季節ごとに葉っぱを新緑、紅葉、桜と変えていきたいと考えています。また今回のクリニックのモチーフになっている鳥の巣箱の時計をつけました。

診察室の構造は1階と大きく変わりません。勾配天井を活かして天窓を設けて、自然光が降り注ぐ明るい空間は外の天気もわかるようになっています。隣は予防接種の計測などを行う部屋です。収納カウンターも十分に確保でき、天井付けのカーテンレールも空間のアクセントになりました。

授乳室は、息子たちが小さい頃にきらいで居心地の良い授乳室を見つけるといつも嬉しかった経験があって、特にこだわりました。子どもたちが小さい頃の外出は気を遣うことも多く、授乳室は人の目を気にせず腰を下ろしてほっとできる数少ない



2階の診察室には天窓を設けました。勾配天井と相まって開放感と立体感のある空間を演出しています。



院長自身の経験から、安心して健診や予防接種に
来られるようこだわりを込めた授乳室。



子育て中のお母さま方に嬉しいと感じていただ
けるような内装や大きな鏡を配したトイレ。



備品を白で統一したスタッフルーム。
限られたスペースの過ごしやすさを考えて構成されています。

場所でした。少し照明を落として、夜の森
に星が光る壁紙と、授乳に最適な高さの
チェアを選びました。思わず寝落ちしてし
まうような座り心地です。

スタッフルームは、雑然としがちなス

ペースを落ち着かせるカラーの壁紙にし
ました。機能を維持しながら空間を確保
する備品を選び、洗濯機上にも天窓を設
け自然光の入る明るく柔らかな空間にな
りました。

る。その中で今回は先生お二人に本当に助
けていただきましたし、康子先生もおっ
しゃったようにチーム全員の力で理想のクリ
ニックが実現できたと感じています。

康子院長 本当にたくさんの方の応援とご
協力があって今に至ります。建物を建てる
という開業の大変さは、想像以上でしたし、思
いがけない問題も多々ありました。でもそれ
を楽しく乗り越えられたのは、今回関わって
くださった皆さまがいてくださったからこそ
と思っております。クリニックへの思いに賛同
してくださった銀行の方々、設計・内装デザイ
ン・現場工事に携わってくださった方々、また
医療機器や医院経営でも現在進行形で多く
の方にお世話になっております。さらに集
まってくれたスタッフの皆さん、どなたが
欠けても今のクリニックはなかったと思いま
す。これだけの多くのご縁に恵まれたこと
は、大変幸せなことです。医院建築や開業に
おいて、一人でできることは限られています
し、一人で背負いこまず、助けや協力を求め
ることが大切で、建物も医療もチームでつく
りあげていくものと感じています。そしてその
過程を楽しむことの大切さも実感しました。
これだけの多くの方々との出会い、思いを共に
できたことは、これから地域医療に携わって
いく上で、大きな原動力になると感じており
ます。皆さまの思いを大切に、多くの患者さ
んやご家族、地域の方々の笑顔と安心を支え
られるクリニックを目指してまいります。

改めて今回のことを振り返りながら 医院建築を考える上でのポイントを教えてください。

康子院長 限られた敷地面積や医療施設と
しての採光条件や開口幅などの制約があり、
その中で、理想の建物の外観も維持しながら、
いかに心地よい空間をつくっていくかとい
う難しさがありました。構造的に難しかった
部分に関しては、内装の工夫次第で十分
補うこともできると感じました。色や質感、目
に入るもの、耳に届く音、環境づくりの大切
さを再認識しましたし、それらは医療と同じ
ように人を支え、癒す力になると感じました。

夫は図面を見たり構造を考えたりするの
が得意で、幼い頃の夢は大工さんだったそう
です。私はもともとインテリアや音楽に興味
があり、夢は美術や音楽の先生でした。お互
い好きなことが全く正反対で、それをクリ
ニックの開業に活かせたと感じています。

増古医師 今回の建築では設計図を読み込
み、本当に細かな修正を緑さんにお願いし

ました。立面図と平面図と見比べながら出来
上がる空間を想像しては改善していきまし
た。そうした建物の構造に対してはより良い
ものを求め熱意をもって取り組みました。反
対にインテリアデザインや色などに関しては
妻がいたからこそ成り立ったのだと感じて
います。

緑 賢太郎先生は図面を本当によくご覧に
なられていて、そのご指摘には私も非常に
助けられました。頭の中で立体の像があった
のだと思います。これはクリニックに限らず
住宅などでもそうなのですが、建物は建築さ
れる方のご資産になるものです。その設計を
お任せいただく以上、誰よりも長い時間図
面を見ることを心がけています。図面という
のは、見れば見るほどよくなるものです。図
面を見ながら、先生方がどう動くのかを立
体的に想像して、どう改善できるかを考え



DATA

松陰こどもクリニック

東京都世田谷区

診療科目：小児科、アレルギー科

延床面積：173.90㎡

協力：三井ホーム株式会社 TEL：03-6757-8631（代表）